
ファンタシースター～幻獣憑依伝～

種

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタシースター〜幻獣憑依伝〜

【Nコード】

N4002X

【作者名】

穉

【あらすじ】

傭兵ミズキは、仕事で赴いたレリクスでエミリアという少女に出会う。

しかし、それはミズキの運命を大きく変える出会いだった。初投稿です。不定期更新ですがよろしく願います。

プロローグ

プロローグ

〈惑星ニューデイズと

ある洞窟〉

明かりで照らされた洞窟に赤子を抱いた女性とイスに座った老人がいる

「あ、あうう」

赤ちゃんは、洞窟の奥にある石の上に置かれた緑の板『グリーンタブレット』

をさわるうとするが女性がそれを止める。

「こらこら、大地神さまにさわっちゃだめでしょ。」

「ほれ、そうおこるでない、アカネよ。その程度で怒る神なら拝んでおらん」

わ。」

「村長」

赤ちゃんをしかる アカネ と呼ばれた女性をさらに村長にたしなめられる

「あ、あううばああ。」

その目を輝かせながらさわったそのとき
バリン、と音をたててグリーンタブレットが砕け散った。

そして、そのかけらが赤ちゃんの目に入り、その漆黒の目が

緑色にそまった。

とある部屋ベッドに女性が寝ている

「またこの夢か、最近みてなかったのになあ。」
そういつて女性が起き上がる

「あゝ着替えて仕事にいゝこおつと。」

プロローグ（後書き）

こんにちは。 よろしくお願いします

ナニしてんのレリクスで！

「やばいよ。二二二はやばいつて。」

「ウルセエなあ。今お前用の仕事もらつてくるからここにいろよ。」
 こんちわ！あたしエミリア。あたしは上司のおっさんに家から引きずり出されて

レリクスと呼ばれる遺跡にあります。しあし、やな予感がするとさつきからいつてん

のに、聞いてもらえません。ムカつく。

「およ、なんだろあれ。」

向こうの方に人が座っていた。しかし、ただ座っているのではなく、なんと、レリクスレリクスの

壁から流れていている水でタキ・ウチをしていた。

[illegible]

私の絶叫をきいていた人たちの反応は様々だった。白い目でみたり、生暖かい目でみられた。

でも、さけんがっていいじゃない、おかしいんだもの。だっておかしいじゃんレリクスの水でタキ・ウチなんて。

一一一

地鳴りが起こるとほぼ同時にレリクスのドアが閉まり始めていた。

「え、なにがおきてるの？」

私がそういつている間にもドアの半分は閉まっていた。それに気

づき走り始めたが、

時すでに遅し。無慈悲にも私の目と鼻の先でドアは閉まった。

「なんなのよおおおおおお」

私の悲痛な叫び声は静まり返ったレリクスに響き渡った。

「ばあっ」

「やっ」

エミリアは驚きのあまり声の主の腹部に肘をいれてしまった。

「ごふっ」

エミリアに肘を入れられた人物はこえをだす。その声を聞いたエ

ミリアは

「人？」

「うう。君は初対面の人にいきなりひじをいれ・・・ごはっ・・・るのか？」

その人物は苦しそうに言う。

「うう、ご、ごめんなさい。でも、あんたは初対面人を驚かすの？」

そういいながらエミリアは振り返った。そして、エミリアを驚かせた人物を見た。

女性だった。髪の色は黒、髪は頭頂部より少し下で結んでいた。

目の色は緑色。服装

は、上半身は胸に包帯を巻きつけているのと、背中に小さなリユックを背負っていた

下半身は、藍色のハカマをはいていた。足には裸足で下駄を履いていた。その人は

自己紹介をした。

「あ、あんたはさっきタキ・ウチしてた人じゃん!!」

エミリアがそういうとその人は

「うん、そうだよ。まだ名前を名乗っていなかったね。あたしはミズキ、フリーの傭兵よ。あなたは？」

スヴァルティア登場（前書き）

書き忘れましたが、ミズキは小さなリュックを背負っています。

スヴァルティア登場

「あたしはミズキ貴女は？」

「あ、アタシハエミリアエ、エミリア・パール」

エミリアは驚きで片言になってしまった。

「よろしくねエミリア」

「こちらこそよろしく、ミズキ」
するとミズキが

「よし、自己紹介も終わった事だし奥にレッツゴー」

そういつて歩き出そうとするミズキをエミリアが止める。

「え、ちょっと待って今なんていった？」

「いや奥に行こうかっていいましたけどナニカ？」

そういつてミズキは不思議そうに首をかしげる。

「いやだっておくには原生生物もいっぱいいるしここで救助を待ったほうが良くない？」

それを聞くとミズキは残念そうにいう。

「はやくも意見がわかれたなあ。しょうがない、じゃあわたしはお奥に行くからじゃあね」

そういつてミズキは奥に歩いていく。その背中にエミリアは声をかける。

「ま、待ってよ。」

スタスタスタと、効果音がつきそうな歩きで止まる気配も無く歩いていく。

「無視しないでよ待って待ってあたしも行くからまって」

半ば泣いた状態で叫んで走っていく。

ブシャッグサッドカツという音をさせながらミズキは自分の得物
”神代”と”剣影”を

巧みに使い分けて原生生物を倒していった。たまに二、三匹残
しておいてエミリアに

残しておいた。

そうして進んでいくと少し開けた場所に出てきたのでやすむこと
にした。

「エミリア、少し休憩しようか」

それを聞くとエミリアは

「ふふ、やっと休憩か。全然休まないんだもんとずっとまってたよ
」

その場で座り込むエミリアを他所にミズキは考えていた。

（この子、さっきから思っていたけどやっぱり見込みがあるかも）
するとエミリアがミズキに話しかけてきた。

「ねえねえミズキ、包帯つけてるけど怪我でもしてるの？」

「ああ、これはさらしって言うてね。怪我をしているわけじゃない
んだよ」

「ふふん」

「さ、話は終わりにしてそろそろ奥に進もうか」

そういつて立ち上がるミズキにエミリアは

「え、あとちょっと」

「つべこべ言わないさきすすむよ」

そういつておくに進むといきどまりで何体か”スヴァルティア”
と呼ばれるものが置いてあった。

「ふふ、走った走った。おいてかないですよ」

ココココココココココココココココココッ

エミリアが来るのをまっていたかのようにスヴァルティアはうきだした。それに気づいたミ

ズキはエミリアに

「スヴァルティアが動き出した戦う準備をして」

そう叫ぶと自分は

「ふう、やるか」

そういうとミズキの目の前に円陣が出た。

「ミラージュオーラ発動」

スヴァルティア登場（後書き）

ミズキの格好はFAIRY TAILのエルザ・スカーレットの装備の一つの袴が藍色Verです。

妖刀神代 ソード

外見は日本刀。

剣影 ツインセイバー

エクステンド使用済み

ミラージュオーラ

「ミラージュオーラ発動」

そういうと同時にミズキの前に赤い円陣が出現した。が、その円陣は碎け散った。そして

その直後にミズキの髪と眼が緋色に染まり、手に持つ神代は紅蓮に染まった。

そしてミズキは走りながら髪留めをはずし、エミリアが居ると思われる方向に向かってり

ユックを投げた。「ゴフツ」という音がした気がしたするが気にせず走る。

そして、手に持つ神代でスヴァルティアを斬った。

だが大して深くは入らなかった。

「ひけん」

ミズキがそういつてこぶしを前に出すと拳から炎の渦が出てきてスヴァルティアを吹っ飛ば

した。まだ煙の立ちのぼる中に走りこみ刀を振り下ろす。振り下ろす途中で神代に火がつき

その熱でスヴァルティアのどこかを切断した。煙から何かの気配を横に飛ぶとその物体は、

スヴァルティアのつめだった。それをギリギリで避けて安心しかけたその時、スヴァルティアはそのつめを横に薙ぎ払った。

―しまった―

そう思ったときにはもう遅かった。死を覚悟したとき、

「デীগ」

スヴァルティアを巨大な土塊を地に伏せさせた。

後ろを見てみるとエミリアが得意げに胸を張っていた。

「張る胸は無いけど」

「ちよっ声に出てるわよ！！」

ミズキがぼそつといたことばに反応していた。

「さ、雑談は終わり、そろそろお敵さんが目覚めるみたいよ」

ミズキは倒れたスヴァルティアの上に乗り突き刺した。そこから炎を流し込みスヴァルティア

アが見る見る内に膨れ上がり破裂した。

ミズキはそこから飛びのき煙が晴れるのを待つと胸に巨大な穴が開いていた。

「仕事おーわりっ」と

あたし、死にました。(前書き)

更新遅れて申し分けません。

あたし、死にました。

「ふゝ、しごとおゝわりつと」

そういつてミズキが伸びをしている間にエミリアはスヴァルティアに近づき足で

突つつきながら言った。

「すごいすごい。アンタを信じてよかったよ・・・え、なに」

エミリアに影が差してその上にスヴァルティアが居手その後ほんのつめを振り上

げて今に振り下ろそうとしていた。

「エミリア、危ない」

走っていつてエミリアを吹っ飛ばした瞬間、背中にとてつもない痛みがミズキを

襲った。

「ぐは、」

自分の腹を見ると五本の鋭い爪が出ていた。そしてそしてその数秒後には、シュ

ツと音をさせてミズキから爪が引き抜かれた。前を向くとエミリアが驚いていた。

「エ・・・リ・・・げて」

ミズキは、エミリア逃げてと、言おうとしたが喉がヒューヒューと鳴るだけで言葉

にはならなかった。そしてミズキの記憶は、エミリアの顔が驚き

から、悲しみに
変わっているところだった。

ミズキが目覚めると目の前には緑髪で白いドレスを着た女性が居た。

「あ、お客さんオキタネー」

「こ、こんにちわ」

ミズキが挨拶をすると女性は驚いた顔をしていった。

「マア、イキナリアイサツナンテ礼儀タダシイワネー。ココワドコッテカオヲシテル
ワネ。」

「ココワクラッド6、スカイクラッド社の所有スルリゾート型コロニーネ。」

「シャッチョサンお客サンがオキタネー」

「ミズキが女性が声をかけたほうを見ると、欠伸をしているヒゲのおっさんが居た。」

「女性がそちらを指差しながら言った。」

「シャッチョサンの方に行つてオハナシシテキテネー」

「それを聞いたミズキが立ちあがろうとすると女性がミズキを見ながら言った。」

「アナタの髪と瞳トツテモきれいな緋色をシテイルネー」

「あ、ありがとうございます・・・え、今なんていいました？」

「ミズキが聞き返すのを不思議そうに見つめながらいった。」

「え、アナタの髪と瞳トツテモきれいな緋色をシテイルツティツタノヨー」

「ちょ、手鏡かしてもらえますか？」

「いきなり焦り始めたミズキをますます不思議そうに見ながらミズキに派手な手鏡を手渡した。」

「手鏡を見た瞬間ミズキは叫んだ。」

「ぐあああああ。なぜだ、何故あたしの眼と髪が緋色になっているー」

いきなり叫んだミズキを心配そうに見ながら女性は言った。

「ドウカシタノ？」

それに対してミズキは沈んだ調子で言った。

「大丈夫ですから気にしないでください。」

そういつてトボトボと言われたほうに歩いていった。

ミズキが近づいていくとヒゲ面はいった。

「オウ、目覚めたか。単刀直入に言おう。お前、ウチの会社にハイ
らねえか？」

それは聞いたミズキは、少々怒り気味に言った。

「いくらなんでも単刀直入すぎじゃないの。名前くらい名乗るのが
礼儀じゃないの。」

「オウスマねえな」

ひげは全然すまなそうに言った。

「俺はクラウチだ。で、さっきの事だがどうなんだ。」

「断る」

クラウチ、と名乗った男はにやけながら言った。

「そうか、あーそう、じゃあ、2000万メセタ」

ほれ、といわんばかり手を差し出してくる。ミズキが黙っている
と、じれったそうに

言った。

「お前の護衛代と、輸送代だよ。」

ミズキは財布をパカツと開けて眼をパチとさせながら言った。
「えーと無い」

クラウチはにやけ顔を更になにやけさせながら言った。

「じゃあ、働いてもらうしかねえよなあ。オイ、エミリアこいつを部屋に案内しろ」

いつのまにきたのか泣いたんだろう赤い眼をしたエミリアが居た。

「え、アンタ大丈夫だったの、じゃあアレは夢だったんだね」

そのとき、カチツと音がしたのは誰も気づいてなかった。

「じゃあ、エミリアあたしの部屋に連れて行ってよ」

「う、うんわかった」

ミズキは、あ、といって振り返りながら言った。

「これ、服代と、机代ね」

と、いつてメセタを置いた。

「はあなんのことだ」

と、クラウチが言ったときにはミズキはもうもうエミリアと扉から出ようとしていた。

はあ、とクラウチがいすに座ろうとした瞬間、クラウチの服は布キレになり、つくえは

鉄片と化していた。

「てめ、ミズキこのことかああああ」

と叫んだが、扉にこだまするだけに終わった。

「シャツチヨサン変態ネ。通報しなきゃつうほー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4002x/>

ファンタシースター～幻獣憑依伝～

2011年11月21日09時40分発行